

ノーマライゼーション思想の父 と 強制収容所体験と

石川美幸 ソーシャルワーカー

由紀さま

冒頭で「大熊先生ではなく……」とお話しされていたので、「由紀さん」と呼ばせていただくことお許しください。ゼミの講義と重なっていたため、終了間際の 10 分のみ Zoom で参加いたしました。ちょうど「要介護 2！ 要支援 2！」と皆さんが V サインで締めくくる和やかな雰囲気がとても印象的で、温かさを感じました。その後、オンデマンドで講義の全編を拝見しました。由紀さんの歩まれてきた道のりが凝縮された内容で、大変興味深く拝聴いたしました。

今回の講義「協働創造～ニセモノ・ホンモノ～」で最も印象に残ったのは、ノーマライゼーションの父であるバンク＝ミケルセン氏と由紀さんのツーショット写真でした。ソーシャルワーカーである私にとって、非常に衝撃的で感動的な場面でした。ナチスの収容所という過酷な体験を経て、障がいのある方が普通の生活を送れるように社会を変えていかれた方と、実際にお会いになった由紀さんの経験は、この講義で最も強く心に残りました。

「当事者のことは当事者に聞く」という姿勢は、福祉の基本であり、バンク＝ミケルセン氏も自らの体験を原点として改革を推し進めたのだと感じます。当事者を輪の中心に据え、何ができるかに目を向け、本質的な解決を目指すことの大切さを改めて実感しました。妥協点である「落としどころ」ではなく、本質的解決を目指すべきだという思いを強く持ちました。

私は認知症事業に関わっているため「世田谷区希望条例」についての動画も視聴したことがあります。若年性認知症の当事者である丹野さんのお話はとても腑に落ちました。

由紀さんが挙げていた「人として大切な 3 つのもの一居場所・味方・誇り」は、私の修士論文のテーマであるこども食堂にも通じるものがあります。こども食堂は全国的に広がり、メディアでも多く取り上げられるようになっていますが「こども食堂＝貧困家庭のための場所」というイメージがいまだ根強く残っていると感じます。たとえば「日本には貧困はない」「うちは違うから利用する必要はない」といった言葉を今でも耳にします。

私がインタビューしたこども食堂の管理者の多くは、食の提供にとどまらず「安心して過ごせる場所」「寄り添ってくれる人がいる場所」「自分らしくいられる場所」としての機能も重視しています。そこは、地域のストレングスを活かし、人の力を引き出すエンパワメントの場でもあります。こども食堂は「困っている人を助ける場」から「人の尊厳や自信を引き出し育む場」へと、確実に変化しつつあります。

今後の講義では、多彩なゲストを通してさまざまな視点に触れられることを、今からとても楽しみにしています。この年齢になると、人とのつながりやご縁によって、思いもよらない道が開かれることも多くなりました。若いころとは異なり「今、自分の中で受け止め、消化しておかないと取りこぼしてしまう」というような感覚から、新たな学びや行動が始まってい

ます。興味が多く履修科目は多いのですが、どれも自分にとってプラスになると信じて、意欲的に取り組んでまいります。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。